

OB・OG 会長の挨拶 —Connecting the dots 点をつなぐ—

第1期ゼミ長 白木 俊介

“You can’t connect the dots looking forward; you can only connect them looking backwards.”
「先を読んで点と点をつなぐことはできません。後から振り返って初めて点と点をつなぐことができるのです。」

これは 2005 年のスタンフォード大学の卒業式における、故スティーブ・ジョブズ氏のスピーチの一節です。2008 年度の OB・OG 会誌 Vol. II でも紹介したこの言葉ですが、彼が亡くなってしまったこの機会にもう一度、取り上げたいと思います。

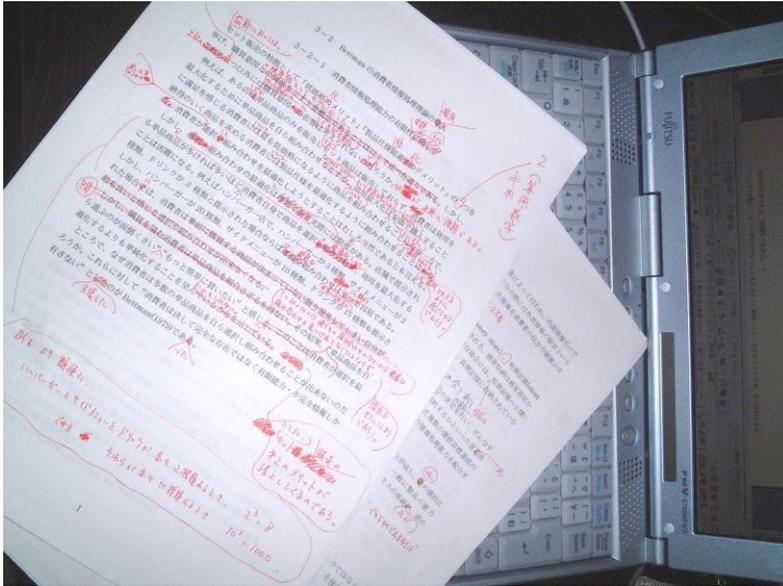
スティーブ・ジョブズはリード大学に入学したのですが、学費が高く両親に迷惑をかけることを苦に思い半年も経たないうちに大学を辞めてしまいます。それから彼は、熱中していたカリグラフィの講義にもぐりこんで夢中に勉強しました。彼はこの授業で、さまざまな字の組み合わせに応じて文字間隔を調整する手法や、美しい字体は何が美しいのかといったことを学びました。もちろんその時、これらが人生で実際に役に立つ可能性があるなどとは思っていませんでした。しかし 10 年後、最初のマッキントッシュ・コンピュータを設計していた時、学生の頃の記憶がよみがえってきたのです。そこで彼は、カリグラフィの授業で得た手法をすべて組み込み、美しいフォントを持った初めてのコンピュータを誕生させました。もし彼が大学であの授業にもぐりこんでいなかったとしたら、マックには複数フォントも字間調整フォントも入っていなかったでしょう。もちろん、大学にいた当時、そんな先々のことまで考えてはいませんでした。しかし 10 年後ふり返ってみると、点と点がはっきりとつながって見えるわけです。



若き日のジョブズ氏とマックのファーストモデル

前置きが長くなりましたが、私自身も年齢を重ねるにつれて「後から点と点はつながれる」という言葉にとっても共感できます。スティーブ・ジョブズのような世紀の大発明とはほど遠いのですが、この年になったからこそ小野ゼミで得た知識、友人とのつながりが役に立っていることをお伝えしたく思います。

広告会社の業務においてパワーポイントを使うことは多くても、ワードを使うことはそれほど多くはありません。ですが、ある日、会社から入社 9 年目を迎えた私に、社員教育をかねて、JAAA（日本広告業協会）の論文投稿および、八火賞（電通



現役ゼミ生当時に著者が食らった小野先生の赤字添削

社内論文)に投稿することが命じられます。多くの対象者は慌てふためく訳ですが、こんな時には小野ゼミで何度となくレポートを書き、文章構成を検討し、それでも小野先生から多くの赤字を頂き、論文を書き上げた経験はとても役に立つわけです。たぶん、今でも私が書いた論文や参考文献リストを小野先生にご覧いただいたら、たくさんの赤字でいっぱいになってしまうのですが…。それで

も、他の多くの対象者と比べると雲泥の差が出るのです(本当は、投稿論文の結果が出てからでないと、「雲泥の差」と書けないのですが、結果は3月以降になるようです)。また、この論文を書き上げるにあたり、4期の小合麻耶さんにもご協力をいただきました(この場を借りて、お礼いたします)。広告業界の業務プロセスに焦点をあてた論文だったのですが、そこで、ヒューレット・パカードでビジネスプロセススペシャリストをされている小合さんを思い出しました。小合さんは4期なので、大学時代にお話する機会はなかったのですが、2008年度のOB・OG会誌の中でご自身のお仕事について書かれていることを思い出し、Facebookを通じて連絡を取りました。小合さんはすぐに相談に快諾してくださり、メールのやり取りや昼食のお時間に情報収集させていただいたのです。それ以外にも、様々なところでConnecting the dotsは起きています。例えば、仕事でシンガポールに立ち寄った際には、シンガポールで勤務している1期の柳川さんに現地のビジネス事情を紹介してもらったり、私の結婚式の際には2期の梶山さん、奈良崎さん、3期の恩田さんに素敵な映像を制作、余興を披露していただいたり、また、時には梶山さんの会社のクライアントの課題(広告会社にどのように売り込みすればよいか?)の相談にのったり、大学生のころは気づかなかった小さな点は次々とつながっています。

環境の変化が厳しい昨今、多くの日本企業は既存のやり方を打破し、新たな革新を起こす必要に迫られています。現役生が社会に出た後、課題を解決する糸口は会社の中の同僚ではなく、他業界にいる友人であることも多いと思います。ちょっとした社外の友人の現場の話に感化されます。それが心の通じあう小野ゼミ生であれば、なおさらです。現役生のみなさんにとっては、小野ゼミで学んだり、作り上げたりした1つ1つのdotは、まだバラバラかもしれませんが、いずれつながること。年齢を重ねるに連れて無数のdotが体に刻みこまれているわけですが、これをつなぐ力というのも、実は大切な能力なのではないかと思います。是非、現役生もOB・OGも、同期はもとより先輩や後輩との接点も大切にしてみてください。

◆結びに

昨年、東日本大震災が起こり、「絆」という言葉がもてはやされました。私自身、これからも家族や友人とのつながりを大切にして絆を深めたいと思う一方で、結婚してライフスタイルが変化し、小野ゼミ生と飲んだり、会ったりする時間が取れなくなっていると感じています。毎年、毎年、「ゼミ合宿に行く」といいながら、いつも行けないままになっており、そろそろ有言実行せねばと思うわけですが…。

そこで最近、ひそかにチャレンジしていることが、Facebook を活用して小野ゼミのネットワーキングです。時間があるときに少しずつ小野ゼミグループを作成し、小野ゼミのメンバーの友達申請にいそしんでおります。小野ゼミも10周年を迎え、同じ教室で机を並べていないメンバーも多いと思いますが、みなさんも是非、同期以外の小野ゼミメンバーと、ゆる〜くつながってみることを大切にしてみてください。意外なところでちょっとした趣味や考え方がつながり、新たな軌跡が生まれることを楽しみにしています。



小野ゼミ第1期から第7期までの有志が集った著者の結婚式にて(2011年2月)